

論文

災害復興とツーリズム (2・完)

——ネパールの世界遺産とアクターネットワーク理論——

Disaster Reconstruction and Tourism (2):
The World Heritage in Nepal and an Actor-network Theory

大野 哲也

桃山学院大学社会学部
(元桐蔭横浜大学スポーツ健康政策学部)

(2018年3月17日 受理)

(1)の続き。

IV. ガイドブックの表象性

1. 掲載されている写真の変化

2013年度版では、p.103～p.111の9ページがパタンのセクションにさかれている。一方、2016年度版でも同じく、p.103～p.111の9ページがパタンの紹介にさかれている。

ページ数が同じであるのは、各ページに書かれてある内容にほとんど変更点がないからだ。つまり地震の前後で、『地球の歩き方』の、少なくとも2013年度版と2016年度版のパタンのパートに関しては、文章や写真なども含めてレイアウトがほぼ同一なのである。

2冊は、パタンが掲載されているページがまったく同じであるばかりか、レイアウトや内容、そして使われている写真の枚数もかなりの部分で共通している。以下では、写真の使われ方と、どのようなことが書かれているのかを具体的にみていこう(表3)。

掲載されている枚数にほぼ変化がないのには理由がある。それは、2016年度版のほと

んどの写真は、地震の前の2013年度版のものを継続して掲載しているからだ。2013年度版と2016年度版でアップデートされているのは、p.103のダルバール広場の写真、p.104の「広場に集う町の老人たち」というキャプションがついた写真、p.105の「ダルバール広場の西側にはさまざまな様式の寺院が並ぶ」というキャプションがついた写真、p.106の土産物屋の写真の追加、p.107のマチェンドラナート寺院の「境内北側には寺院に向かって拝む動物の像がある」というキャプションがついた写真、p.109の、掲載する宿泊施設の1軒が変更になったことに伴うものの計6枚にしか過ぎないのだ。

このうち、追加された土産屋と、変更になった宿泊施設に関しては考慮からはずしてよいと思われるので、実質的には30枚(31枚)中4枚しか変更がなされていないことになる。つまり2013年度版で使用した写真30枚の2016年度版への流用率は、2015年度版は出版されなかったもので、出版するまでに丸1年以上の時間的余裕があったにもかかわらず、87%にも及ぶのである。したがって、アップデートされなかった26枚の被写体は、

表3 2013年度版と2016年度版のパタンのパートで使われている写真の枚数と記載内容

ページ	2013年度版	2016年度版	記載内容
p.103	1	1	パタンのパートの最初のページである p.103 には、ページの上部3分の1ほどの大きさのダルバル広場の写真を掲載して、パタンがどのような場所であるかが読者に視覚的に一瞬でわかるようなレイアウトになっている。そしてオリエンテーションとして町の「歩き方」が文章で綴られている。
p.104	1	1	パタンのマップがほぼ全ページを占めるほどの大きさで掲載されている。
p.105	2	2	p.105～p.108の4ページにわたってパタンの「見どころ」が写真とともに掲載され、「見どころ」の概要がついている。一番のクライマックスである「ダルバル広場」が地図と写真2枚をつかって説明されている。具体的には、広場のなかの「ビムセン寺院」「ヴィシュワナート寺院」「クリシュナ寺院」「ハリ・シャンカール寺院」「タレジュの鐘」についての解説がある。
p.106	5	6	ダルバル広場内の「旧王宮」「パタン博物館」が3枚の写真をつかって紹介されており、さらにダルバル広場に隣接しているゴールデン・テンプルが写真2枚とともに紹介されている。2016年度版の写真が1枚多いのは、日本人が経営する土産屋が「読者投稿」というかたちで写真1枚とともに、新たに掲載されているからである。
p.107	4	4	ダルバル広場から徒歩数分の範囲にある「クンベシュワール寺院」「マチェンドラナート寺院」「マハボーダ寺院」が3枚の写真をつかって解説されている。また、「旅のヒント」としてダルバル広場に隣接したところで営業をしている食堂が写真とともに紹介されている。
p.108	3	3	ページの上半分にはダルバル広場から徒歩1時間ほどのところにある「動物園」と「チベット難民キャンプ」が、それぞれ写真1枚ずつとともに掲載されている。下半分には「パタンの職人たち」として、日本でも著名なパタン在住の画家のロク・チトラカールが紹介されている。『地球の歩き方 D29 ネパール』には「ネパール百科」というパートがあり、そこに「ネパールの神さま仏さま」というセクションがあるのだが、そこで紹介されている絵はすべてチトラカールが描いたものである。
p.109	6	6	宿泊施設3軒、レストラン3軒が紹介されている。2冊では、宿泊施設が1軒変更されているが、レストランも含めて残り5軒には変更がない。
p.110	4	4	2ページを使って「おすすめ散策ルート」が、歩くルートを示した地図と、7枚の写真をつかって具体的に紹介されている。スタート地点はパタン・ドカと呼ばれるゲートで、ゴールはダルバル広場である。歩くだけならば30分程度の距離だ。
p.111	4	4	
計	30	31	

* 2013年度版には、パタンのパートの上部にパタンのパートのアイコンとしてストゥーパの目の写真を付している。同じ写真が各ページに付けられているので、ここではそれを算入していない。なお、p.103には、同じストゥーパの目の写真が2枚使われているのだが、それらもここでは算入していない。

地震前の状態が、地震後の姿として読者に提示されているとってよい。

『地球の歩き方』はなぜ、被害を受けた寺院などの建築物の写真をアップデートしなかったのだろうか。

以下では、その疑問を解き明かすために、まず、ほとんどの写真で2013年度版から変更がなされなかった2016年度版の写真を分析していこう。全部を分析する紙面の余裕がないので、本論文ではp.106に掲載されている6枚の写真に焦点を絞る。p.106に焦点化する理由は、2016年度版において、宿泊施設とレストランの紹介ページ以外では、このページが1ページあたりの使用写真枚数ももっとも多いからだ。

ただし以下で掲載されている写真として提示するのは、同書とほぼ同じアングルから筆者が撮ったものである。著作権の問題があり、『地球の歩き方』に掲載されている写真そのものを使うことができないのでこのような方法に依ることをあらかじめ断っておく。

分析は、2013年度版と2016年度版の写真とを比較するために、同書の写真から引いたアングルで筆者が写した写真を比較するという方法をとる。したがって、ガイドブックの写真の次に提示しているのは、2016年8月～9月に、筆者が写した同じ場所の、ただし『地球の歩き方』に掲載されている写真とは別アングルの写真である。

2. 掲載されている写真が意味するもの

写真3 p.106 シッディ・ナラシン・マツラ 王の像

2013年度版と2016年度版では、この像を横から見た写真が掲載されているが、筆者は同じ写真を持っていなかった。この写真はネパール在住の民俗写真家であるアムリット・バジュラチャリヤ氏から提供をうけたものである。

写真4 2016年8月 筆者撮影

シッディ・ナラシン・マツラ王の像は地震



写真3 p.106 シッディ・ナラシン・マツラ 王の像



写真4 2016年8月 筆者撮影



写真5 p.106 ダルバール広場のムル・チョーク



写真7 p.106 土産屋ネパール・ガネーシャの店内



写真6 2016年8月 筆者撮影



写真8 2016年8月 筆者撮影

で崩落して以来、存在していない。像が載っていた台座と支柱はかろうじて残った。そこには足場が組まれ、周囲はフェンスで囲まれて立ち入り禁止になっている。しかし、2013年度版にある「旧王宮の前に立つシッディ・ナラシン・マッラ像」というキャプションは2016年度版でも一言一句修正されていない。

写真5 p.106 ダルバール広場のムル・チョーク

2013年度版の写真は地震前に撮られたものなので、また、2016年度版でつかわれている写真は2013年度版からアップデートされていないので、このような修復のための機材類や立ち入り禁止を示すテープなどは写っていない。

写真6 2016年8月 筆者撮影

ムル・チョークでは足場が組まれ修復工事

がおこなわれている。足元にはまだ瓦礫が残っている。2013年度版のこの写真についている「見事な木彫装飾が施されたムル・チョーク」というキャプションは、2016年度版でもそのまま使用されている。

写真7 p.106 土産屋ネパール・ガネーシャの店内

2016年度版に掲載されている写真は、店が現在の場所に移転する前のものである。この写真は、移転後のものなので、同じ店内の



写真9 p.106 パタン博物館



写真10 2016年8月 筆者撮影

写真ではあるものの掲載されたものとは商品の展示レイアウトが異なっている。なお、2013年度版にこの店の写真は掲載されていない。2016年度版のキャプションは「センスの良い雑貨が揃う」である。

写真8 2016年8月 筆者撮影

ネパール・ガネーシャ前の Vishwa Narayan 寺院は地震で完全倒壊して土台しか残っていない。周囲には、再建築するときには再利用するために、崩壊時に分別された、形の良いレンガや木材が山積みされていた。

写真9 p.106 パタン博物館

2013年度版と2016年度版では、写真ばかりではなく、「中庭にはカフェもある」というキャプションも変更されていない。

写真10 2016年8月 筆者撮影

ダルバール広場の北側から南方向を見た風景。左側の建物がパタン博物館。パタン博物



写真11 p.106 ゴールデン・templの入り口



写真12 2016年8月 筆者撮影

館も含めてダルバール広場では大きな被害がでた。右のヴィシュワナート寺院には足場が組まれていた。寺院に人が立ち入らないように設置されているフェンスの右下には、それが日本からの援助であることを示す日の丸の国旗がつけられている。

写真11 p.106 ゴールデン・templの入り口

2013年度版と2016年度版には同じ写真がつかわれている。「2体の獅子に守られた寺院入口」というキャプションも同一である。つまりアップデートはされていない。

写真12 2016年8月 筆者撮影

ゴールデン・templの前の家は地震で大きく歪んでしまい、倒壊するのを防ぐために何本ものつかえ棒が設置されている。住んでいた家族は避難したため、ここは現在、空



写真 13 p.106 ゴールデン・テンブルの境内



写真 14 2016年8月 筆者撮影

き家となっている。改修のめどはたっていない¹⁾。

写真 13 p.106 ゴールデン・テンブルの境内

2013年度版と2016年度版には同じ写真が使われている。この写真も、「本堂は金で覆われている」というキャプションもアップデートはされていない。

写真 14 2016年8月 筆者撮影

地震で損壊した部分は、被害がこれ以上広がらないようにブルーシートで覆われている²⁾。

V. ガイドブックの表象の指向性

2013年度版の写真の多くが2016年度版に流用されている事実は先述したが、驚くべきことは、添えられている文章もそれらのほとんどが更新することなく引き継がれていることだ。たとえば、p.105からp.106にあるダルバール広場の寺院の説明、p.107のクンベシュワール寺院、マチェンドラナート寺院、マハボーダ寺院の解説、p.108の動物園とチベット難民キャンプの説明は、写真のキャプションも含めて、文言が一言一句同一である。

その一方で、地図のアップデートや価格・料金・運賃などのアップデートは可能な限りおこなわれているようだ。2016年度版のp.103の「アクセス」欄には、カトマンズからパタンへの行き方が解説されており、バスステーションの名前の変更や運賃などは最新のものと更新されている。

これと同様に、p.104とp.105では地図のアップデートがなされている。

加えて、p.105では「地震の被害について」という欄が追加されている。そこには、「ダルバール広場に建っていたジャガナラン寺院とハリ・シャンカール寺院が大きい被害を受けた。ほかの建物は比較的軽度の被害で済んでいる。(2016年4月現在)」(『地球の歩き方』編集室2016:105)という記述がある。

p.106では、「読者投稿」による土産屋ネパール・ガネーシャの投稿者(文)の変更と写真の追加(2013年度版には店の写真はないが、2016年度版では店の写真が追加されている)がなされている。また、「パタン博物館」の入場時間の変更もなされている。さらにp.108では「動物園」のチケットの販売時間がアップデートされている。修正がもっともなされているのはp.109の宿泊施設とレストランのページであり、全ての店舗で宿泊費や料理の値段が最新のものと更新されている。

こうした細やかさが感じられる部分はある一方で、不可思議な部分も多い。

その最たるものは、p.105 から p.106 にかけて掲載されているダルバール広場のセクションだ。

p.105 にはわざわざ「地震の被害について」という欄を追加して2つの寺院が大きな被害を受けたと読者に伝えているものの、その内容がきわめて不完全なのだ。実際には、バイ・デカ寺院、ハリ・シャンカール寺院、ジャガナラヤン寺院の3つが完全崩壊して土台しか残らず、クリシュナ寺院とヴィシュワナート寺院は大きく歪み、大量のつかえ棒なしでは躯体を支えきれない状態にある。デグタレ寺院のパゴダ（塔の部分）の上部2階は崩落、2つあったパティ（人々が休めるようにつくられた小屋状の建物。ネパールには町のあちらこちらに設置されている）は完全倒壊、シッディ・ナラシン・マツラ像は柱の途中から折れてしまい崩落してしまった。だが、フェンスで囲まれているクリシュナ寺院の写真は2013年度版からアップデートされていない。2016年8月時点では存在しないシッディ・ナラシン・マツラ像の写真も2013年度版のものが2016年度版のp.106になんの変更もなく掲載され続けているので、あたかも、そこに鎮座し続けているかのようだ³⁾。

周囲は大きな被害が出てフェンスだらけにもかかわらずパタン博物館の写真も文章もアップデートされていない。かろうじてp.105「ダルバール広場の西側にはさまざまな様式の寺院が並ぶ」というキャプションがついた写真が地震後のものに変更されているものの、崩壊したバイ・デカ寺院やその近くの工事用のフェンスや、穴が空いた屋根を覆うビニールのシートなどはアングルから巧みに除かれている。写真を注意深く見れば、奥のパゴダに足場が組まれていることがわかるのだろうが、おそらく多くの読者がガイドブックの写真の一枚一枚にそこまで目を凝らすことはないだろう。ダルバール広場がこうした状況で

あることは、この文章を読み写真を見た読者には正確には伝わらないのではないか。

また、p.110 と p.111 の2ページにわたり掲載されている「おすすめ散策ルート」のセクションも不正確だ。ここで紹介されているルートは被害が大きく、至る所で崩壊がおこっているにもかかわらず、文章も写真も、2016年度版は、何の修正もほどこされないまま2013年度版をそっくりそのまま引き継いでいる。

たとえば、ビムバハ池にあるパティは完全倒壊して跡形もない⁴⁾。その横に立っているチャンドスワリ寺院は大きく傾いて今にも崩壊しそうな状態だ。しかし掲載されているビムバハ池の写真は、偶然にも、そのダメージを受けた場所を外したアングルのものが2013年度版からそもそも採用されている。したがって、写真を見る限り、読者が現状を知ることはない。

ロカキルティ大僧院の写真も偶然の要素が大きい。というのは、現在は、すぐ横の空きスペースに地震で出た廃棄物が山と積み重なっているからだ。だが、2013年度版から継続して使用されている写真は、偶然にも、最初からその場所を巧みに外しているアングルが採用されていた。

また、間違っ「ニヤカツカ」と紹介されているが本当は「ナガバハ」にある歴史を感じさせる建物は、崩壊をかろうじて免れたものの大量のつかえ棒で支えなければ自立できないほど傷んでしまった。2016年度版の写真は、これも、2013年度版の、地震が起こる前の写真を継続して掲載しているのだから、当たり前だがつかえ棒がない。したがって、読者は現在の真の姿を知る由もない。

ゴールデン・templは、現在、先に提示したように一部をブルーシートで覆われて修復されるのを待っている状態だが、地震前の写真をそのまま引き続き掲載しているので、これも読者に真の姿は伝わらない。

ちなみに、p.110 には2枚のパティの写真があるが、写真のパティは、この散策ルート

上にはない。2つのパティはパタンのまったく別の場所にあるのだ。2016年9月に2箇所に行ってみると、一つのパティの横の空きスペースには、大量の廃棄物と再利用するための建材が山となしていた。もう一つのパティのすぐ横では、インフラの復旧工事がおこなわれており、道路に大きな穴が空いていた。

ゴールデン・templの写真も2013年度版からアップデートされていないので、ブルーシートは、結果的に「隠蔽」されていることになる。マチェンドラナート寺院の写真は、青いフェンスが新たに設置されたものにアップデートされているが、同じページに掲載されている大きく損傷したマハボーダ寺院の写真は地震前のものからアップデートされていないので、現在の姿が読者に伝わることはない。

こうしたことを勘案すれば、どの写真を更新するのかということは、『地球の歩き方』を出版する『『地球の歩き方』編集室』によって、相当意図的におこなわれていることが理解できる。たとえアップデートをしたとしても掲載される写真は地震の被害が読者に伝わらないものが選択されている傾向が強く、アップデートしないものは、あたかも何の被害も受けていないかのようだ。文章にも変化がないのだから、これから現地に足を踏み入れる読者は地震の被害を相当低く見積もることだろう。

また、「アップデートしようにもそもそも写真がないのでは」という危惧は当たっていないように思える。というのも、地震によってどれほどの被害が出たのかを「地震の被害について」(p.105)というコラムをつくって解説し、p.103とp.104のダルバール広場の写真は、2016年度版では2013年度版から地震後のものにアップデートをしているからである。また、大きな被害を受けなかったマチェンドラナート寺院(p.107)の写真は、なぜか同じアングルのものに、ほとんど変化していないにもかかわらず、アップデートしているのだ。

したがって、一部がブルーシートに包まれたゴールデン・templ (p.106)、Gajur (尖塔) が崩落したクンベシュワール寺院(p.107)、あるいは塔の全体が歪み全体を修繕のための足場で包まれたマハボーダ寺院(p.107)の地震後の写真がないということは、まず考えられない。さらに、「当該寺院への取材には行けなかった」ということも、高い確率でありえない。この3つの寺院は、いずれもダルバール広場から徒歩10分以内で行ける距離に建っているからだ。しかも驚くべきことに、現在は存在しないシッディ・ナラシン・マッラ像の写真までを、アップデートせずに、そのまま継続して使い続けていることを勘案すれば、「大きな被害が出たことはあえて読者に伝えない」という強い意志を感じざるをえない。

つまり、「実際の被害の状況が瞬時に理解できる写真は採用しない」という作り手側の編集方針がくっきりと浮かび上がるのである。

もう一つ指摘しておかなければならないのは、肖像権の問題である。2016年度版のp.107には、2013年度版から引き続き、「ネワールの飲み屋」として郷土料理ウォーを焼く女性の正面から写した写真が掲載されている。

筆者が2016年9月にこの女性本人にインタビューをすると、「ここに座るとずっと仕事だから、写真を撮られるのは気にならないし、そもそもわからない。掲載について尋ねられたことはないから、日本の本に自分の写真が載ることは知らなかった」と答えた。ある時、いつものように店で料理をしていると、客としてやってきた日本の旅行者がガイドブックを見せてくれて、自分の写真が日本の本に載っていることに、はじめて気づいたという。「遠い日本のことだから気にはならないわ。腹も立たないわ」と彼女は語っていたが、当人が自分の写真が本に掲載されることを気にしないことは、本人の承諾なしで掲載しても良いということの意味しない。

2016年7月に、『地球の歩き方』を発行し

ているダイヤモンド社にインタビューを申し込んだところ、「震災、紛争、テロなどが頻発している昨今、たいへん多くの方からインタビューの申し出を受けますが、それらはすべて断っております」という回答を受けていたので、現在のところ、ダイヤモンド社の見解を聞くことはできていない。したがって、女性の言葉が事実であるかどうかはわからない。だが、当人が「自分の写真が載ることは知らなかった」と断言しているかぎり、ダイヤモンド社の写真掲載の許諾をめぐる交渉が、そもそも交渉をしたのかということも含めて、なんらかの問題を含んでいたことは否めないだろう。

VI. ガイドブックの威力

では、このような『地球の歩き方』には、それを利用する人たちにどのような効果をもたらしているのだろうか。

2013年度版にも2016年度版にも掲載されている土産屋ネパール・ガネーシャは、2012年7月にダルバール広場から徒歩1～2分の場所にオープンした。経営者の池原玲子さんは52歳のときに思い立ってネパールに単身で移住してきた行動力のある女性である。そんな池原さんの手による店は、地震の後、2016年4月にそれまでの場所から道を挟んで50メートルほど離れた場所に移転し再オープンした。

店が『地球の歩き方』に初掲載されたのは、2013年のことだったという。店を利用してくれた客の一人が投稿してくれたのがきっかけだった。

大野：これ（『地球の歩き方』）に載ったか載らないかっていうと、売り上げ的にはどんなに違うんですか？

池原：相当、違うと思います。

大野：そうですね。載らない時が100としたら、載ったらどれくらいになっちゃうんで

すか？

池原：400、500。

大野：え、そんなに威力がありますか？

池原：あると思います。『歩き方』は旅行者のバイブルだと思う。（日本人にとってネパールのガイドブックといえば）これくらいしかないじゃないですか？あとはブログ。書いてくれたらすごい影響があります。

大野：どれくらい変わるんですか？

池原：3倍くらい。

世界を見渡せば、いろいろな言語でいろいろなガイドブックが出版されている。そのなかで世界の旅人からもっとも高い人気を博しているのは、おそらく『ロンリー・プラネット (Lonely Planet)』の英語版だろう。

だが、多くの日本人にとって、英語のガイドブックは使いにくい。また、『ロンリー・プラネット』は、世界中の英語話者を対象としているということもあり、多くの日本人旅行者が欲する日本料理店や日本人が経営している宿泊施設の情報が少ない。それらの理由が、日本語で書かれ、現地の日本情報に長けている『地球の歩き方』の日本での人気を盤石にしている。

したがって、現地で観光ビジネスを営む人たちにとって『地球の歩き方』に掲載されるかどうかは売り上げに大きな影響を及ぼすことになる。

2012年7月にオープンしたネパール・ガネーシャの場合、はじめて『地球の歩き方』に掲載されたのは、2013年7月のことだった。そして、『地球の歩き方』に掲載された2013年7月から翌2014年6月までの1年間の売り上げは、オープンした2012年7月から初掲載される直前の6月までの1年間の売り上げの2.68倍に及ぶのである。つまり、『地球の歩き方』に掲載されるかどうかは、店にとってはきわめて重要な意味を持つ。

こうした現象は、現地を訪れるツーリストにも言える。地震が起こって以来、多くの日本人ボランティアがネパールにやってきた。

ネパールに初めて来ることになった者のなかに、2014年に創設されたボランティア団体である「TAP smile for NEPAL」の一員として、地震を機にボランティア活動に初めて参加して、現在でも活動を続けている後藤純輝さんがいる。

大野：初めてネパールに初めて行った時、ガイドブックは持って行きましたか？

後藤：僕は持って行きました。『地球の歩き方』。

大野：『地球の歩き方』、持って行きましたか。

後藤：そうですね。あとはインターネットで調べたのをプリントアウトして持って行ったり。

大野：ネパールに行くと、帰りに「震災復興の募金のつもりで」「震災でみんな苦労しているのだから」という気持ちで、お土産を買ったりしますか？もし買うのだとしたら、どこで、なにを、いくらくらい買うのでしょうか？

後藤：僕としてはお金を使います。理由としては、やはりあの震災後ネパールへの旅行者の数は激減しました。観光立国としての一面もあったネパールにとって、このことは大打撃です。そのような意味もあり、できる範囲でお土産を買ったり現地のレストランに入ることはあります。むしろ、素人の我々が変にボランティアや支援をおこなうよりは、単純にネパールを旅行したり、ネパール観光を促すような情報をSNS上で投稿したりする方がよっぽど現地にとっての支援になると考えているくらいです。金額としては2,000から3,000ルピーくらいでしょうか。

後藤さんは、ネパールに初めて赴くとき、『地球の歩き方』を持って行ったことを、さも当然のごとく筆者に語った。また、支援の一環として土産物を買って日本に帰国したことも語ってくれた。

「TAP smile for NEPAL」の一員として大

地震前から活動をしてきた団体代表の長尾海さんと副代表の中澤優風さんにまったく同じ質問をすると彼女たちは次のように語った。

大野：初めてネパールに初めて行った時、ガイドブックは持って行きましたか？

長尾：持って行かなかったです。宿にあったので、『地球の歩き方』が。それは読みました。

大野：宿ってというのは？初めてネパールに行って泊まったのはカトマンズですか？

長尾：バクタプルってわかりますか？あっちのほうで日本人の方が旅館をやっていて、そこでお世話になりました。

大野：ネパールに行くと、帰りに「震災復興の募金のつもりで」「震災でみんな苦労しているのだから」という気持ちで、お土産を買ったりしますか？もし買うのだとしたら、どこで、なにを、いくらくらい買うのでしょうか？

中澤：私たちは主にタメルでお土産を買っています。あまり「震災復興」のような名義では買い物をしませんが、値段交渉などはあまりおこないません。少し高いと感じても自分が納得すれば買うようにはしています。また、ネパール語で会話をするのでそこまで高い値段を言われることも少ないです。日本で報告会を開いたときに物販をしているのでそのものを買ったり、あとは紅茶が多いと思います。値段は、紅茶を20個買い約3,000ルピーくらいですかね。あとはTシャツも何枚か毎回買います。

長尾さんと中澤さんは『地球の歩き方』を持参することはなかったものの、宿にあった『地球の歩き方』は読んだと語った。海外に点在する日本人御用達の宿には『地球の歩き方』が置いてある場合が非常に多い。また、宿の経営者が日本人であれば、旅行者は、自身が必要とする情報は宿の主人から得ることが必ずできるという安心感がある。日本人が経営する宿に宿泊することをあらかじめ決め

ていた彼女たちは、情報の収集という意味では安心感があったのかもしれない。

また、彼女たちも、後藤さんと同様に、支援の一環として土産物を買って帰国したと語った。

こうしたボランティアの支援的な金銭の使い方は、ネパール・ガネーシャの売り上げからも裏付けられる。2014年7月から2015年6月の売り上げを見てみると、地震のためにほとんど営業できなかった2015年4月と5月の2ヶ月間を含めても、その売り上げは、開店当初1年の3.26倍にも及ぶのである。つまり、震災直後にネパールにやってきた、主に日本人ボランティアは、後藤さんのように「支援」を意識するか、長尾さんと中澤さんのように、ふっかけられて「少し高い」と感じたとしてもそれを諾として、彼らのボランティアという矜持を胸に、彼らにできる範囲で土産を買い込んだのである。

Ⅶ. ガイドブックと被災からの創造的復興

本稿の目的は、2015年4月にネパールで起こった大地震を事例にして、『地球の歩き方』というガイドブックが被災からの創造的復興にどのように機能しているのかを考察することにあつた。

本稿で明らかとなったのは、被災地域で観光業に従事する者も、そして日本から復興ボランティアとしてネパールにやってくる者も、ガイドブックによって大きな影響を受けているということである。さらに、ガイドブックが重要な役割を果たしつつ新たなネットワークが構築されつつある、その萌芽を確認することもできた。

ボランティアは、ガイドブックを頼りにネパールにやってくる。被災地域の土産屋は、ガイドブックに掲載されることで、やってくるボランティアを客として確保することができる。そしてボランティアは、地域振興に貢

献できることを願いながら、土産物を購入して帰国の途につく。こうした円環によって、地域の創造的復興は、それがたとえ小さな一歩だったとしても、着実に前進を果たしていくのである。

しかし、ガイドブックによってもたらされるこれらのプラスのフィードバックは、いびつな表象によって駆動されていた。端的に言えば、それは被害の「隠蔽」である。『地球の歩き方』に掲載されている写真を詳細に検討した結果、地震後に発売された『地球の歩き方』は、地震に関する記述はあるものの、そして地震で被害を受けた寺院などの写真は掲載されているものの、それらは状況を「正確」に伝えたものではなく、被害を「隠蔽」している側面があることが明らかとなった。

ただ、このような編集方針は、ネパールにツーリストを向かわせる方向に機能することだろう。なぜなら、そもそもネパールのガイドブックを購入するということは、その人の「ネパールに行きたい」という意思を表しているからだ。そのような意思を持っている時に、大きな地震があり甚大な被害がでたはずなのに、掲載されている写真を見る限り、観光地では大きな被害を免れたというような表象がガイドブックでなされているからである。これを読み、写真を見た読者は、「観光には、ほとんど影響はないだろう」と安心してネパールに出かけていくことだろう。

こうした『地球の歩き方』の編集姿勢を「情報を正確に伝えるというメディアの本来の役目を果たしていない」と批判することは簡単である。しかしそのような単純なものの「見方」では、災害復興の困難性と複雑性を理解することはできない。

なぜなら、①先の地震では1万人近い死者が出たということ、②ネパールの経済的状況が世界的にみると最貧国に位置しているということ、③日本から遠路はるばるやってくるボランティアの善意、④被災地で復興のために懸命に努力する人びと、⑤今でもPTSDに苦しんでいる多くの人が存在すること、⑥

崩壊した世界遺産の寺院は実は80年前の地震で一度崩壊してしまいその後新たに再建された「新築物件」であること、⑦たとえ、そういう「いびつ」さによってネパールにツーリストが誘われたとしても、それも含めて創造的復興に、-どようにかはわからないが-、機能することには違いない、ということなどの要素群をとすれば捨象することにもつながりかねないからだ。批判して切り捨てるという姿勢だけでは、被災地で困難な生活を日々生き抜いている人びとに寄り添うことはできない。

したがって、私たちが今後しなければならないことは、ガイドブックというモノが媒介することによって現象するツーリズムやネットワークが、上記の困難をどのように克服することができるのか/できないのか、ということをより深いレベルで、より広い視野で考察し続けることだろう。

ただし、ここで確認しておかなければならないことは、「ネパールに赴くすべてのボランティアやツーリストは、必ずガイドブックを携行している」と本論が主張しているわけではないということだ。ガイドブックを持たずに、長年ネパールに通い続けているボランティアがいることを筆者は知っている。だが、ボランティアにせよツーリストにせよ、「これまでガイドブックを手にしたたり目を通したりしたことはない」「ガイドブックを参考にしたことは一度もない」という人は、おそらく存在しないだろう。本論が主張したいのは、たとえガイドブックを所持あるいは携行しなくとも、ある人が見知らぬ場所に行こうと思いついたときに、ガイドブックは大きな役割を果たすということであり、そうしたガイドブックへの依存性は、災害復興という場においても非常に高いということなのである。

もう一つ指摘しておかねばならないことは、ガイドブックが「ガイドする」という本来的な機能とは異なった機能性を発揮することで新たに創造される人びとのアクターネットワークが、被災者の心のケアにも繋がっていく

可能性を秘めていることである。たとえば、ゴールデン・テンプルを中心にして形成されているコミュニティでは、大地震後、日本人の支援者によってデイ・ケアセンターが新たにつくられた。そこで被災して心に大きな傷を負った地域の人びとに体操を指導したり、茶話会を催しながら心のケアに取り組んでいる日本人ボランティアの理学療法士がいるのだが、彼女は、土産屋ネパール・ガネーシャに商品を納入する日本人ボランティアの友人なのである。

さらに、この理学療法士は、後藤さんとも、ネパールで知り合って以来の友人なのだ。

ネパール・ガネーシャが『地球の歩き方』に掲載されることによって、震災後も売り上げを大きく伸ばし続けている事実を思い起こせば、細い糸で繋がったネットワークではあるかもしれないが、こうしたネットワークが新たな「動き」を生んでいく可能性は、決して小さくはないだろう。

ツーリズムと被災者の心のケアが直接的に関連するかどうかは、被災者のツーリズムへのかかわり方や、ツーリストの被災地へのかかわり方、あるいはツーリズムの形態に大きな関係がある。だが、たとえ双方向に直接的な繋がりがなかったとしても、双方がネットワークで繋がることについては、可能性があるだろう。ガイドブックを含み込んだネットワークは、さまざまな要素を巻き込みながら、日々生成・刷新され続けているからである。そして、このネットワークは、「観光に関与できない者にとっては、やってくるツーリストは、騒音とゴミを撒き散らしながら、カメラやビデオで自分のプライバシーを侵害し、交通渋滞や混雑を生じさせて自分の日常生活を脅かす単なる迷惑な存在でしかない」というような感情を変化させる可能性も持つ。たとえ、今は直接的には観光に関与していなくとも、間接的には観光と接続しているからであり、それは、将来の直接的な関与の可能性を開くことでもあるからである。

こうした多様な要素を勘案したうえで、

「新築物件」の文化的真正性の議論もなされなければならないだろう。従来からの「再建されたものだからホンモノではない」というような指摘も、あるいはまた「再建されたモノだとしても、過去からの連続性があるのでホンモノである」というような主張も、あまりにも単純で一面的なものの見方であり、多くの要素が捨象されすぎているからである。本論で指摘したようなさまざまな要素を含み込んだうえで、真正性の議論を深めていくことこそが、観光研究のさらなる前進に、さらには被災地域の創造的復興に繋がっていくのである。

【注】

- 1) 2018年2月に現地を訪れた際には、ゴールデン・テンブル前の建物は完全解体されたうえで、新しい建物が建築されている途中だった。
- 2) 2017年8月に調査でパタンを訪れた際には、ゴールデン・テンブルの修繕は完了していた。
- 3) 2017年8月に調査でパタンを訪れた際には、修繕を終えたシッディ・ナラシン・マツラ王の像が元の場所に設置されていた。
- 4) 2017年8月に調査でパタンを訪れた際には、パティも再建されていた。このように、震災からの復興は、スピーディとはいえないかもしれないが、着実に進展している。

【参考文献】

- Brahma, Shumsher J.B. Rana, 1934=2013, The Great Earthquake in Nepal (1934A. D.), Ratna Pustak Bhandar.
- 小松秀雄、2007「アクターネットワーク理論と実践コミュニティ理論の再考」『神戸女学院大学論集』第54巻第2号、pp.153-164。
- 塩崎賢明、2015「序章 震災復興学に向けて」神戸大学震災復興支援プラットフォーム

ム編『震災復興学 - 阪神・淡路20年の歩みと東日本大震災 -』ミネルヴァ書房、pp.1-13。

『地球の歩き方』編集室、2013『地球の歩き方 D29 ネパール 2013～2014年度版』ダイヤモンド社。

『地球の歩き方』編集室、2016『地球の歩き方 D29 ネパール 2016～2017年度版』ダイヤモンド社。

Lippmann, Walter, 1922=1987『世論 (上)』岩波文庫。

【HP】

Central Bureau of Statistics, 2014, POPULATION ATLAS OF NEPAL, Central Bureau of Statistics HP, (2016年11月23日取得, <http://cbs.gov.np/atlas/tables.html?chapter=2&table=2.1>).

Ministry of Culture, tourism & Civil Aviation, 2015, NEPAL TOURISM STATISTICS 2015, (2016年11月28日取得, http://www.tourism.gov.np/images/download/Nepal_Tourism_Statistics_2015_forwebsite_edited1.pdf).

National Planning Commission, 2016, Third Plan, (2016年11月28日取得, http://www.npc.gov.np/images/download/Thirs_ENG.pdf).

日本赤十字社、2004=2008『災害時のこころのケア』日本赤十字社ホームページ (2016年11月21日取得, <http://www.jrc.or.jp/activity/saigai/pdf/care2.pdf>).

謝辞

*貴重な写真を提供して下さった、パタン在住のエスノ・フォトグラファー、アムリット・バジュラチャリヤ氏に心より感謝申し上げます。

付言

- * 本論文は、科学研究費の助成（研究課題／領域番号 16K02087）を受けておこなった研究の成果の一部である。